

[講演要旨]

史料からみる宝永地震(1707年)の際の日向国の被災状況

安藤正純(宮崎県立図書館)

§ 1. はじめに

従来、宮崎県では大津波で現宮崎市内の一部が陥没した外所(トントコロ)地震を代表とする日向灘沖地震に研究の重点があったが、今日では、深海の南海トラフを震源とする南海地震にも注意が向けられるようになってきている。

県内で被災記録の残る南海地震は4回[仁和地震(887年)、宝永地震(1707年)、安政南海地震(1854年)、昭和南海地震(1946年)]であるが、まだ研究はあまり進んでいるとは言えない段階であり、特に9世紀の仁和地震に関しては、史料が極端に少なく伝承の域も出ないものである。

そこで今回は、古い時期の地震でありながら、史料数も少なくはなく、ある程度具体像を描くことができる宝永地震にしぼって、その被災状況をまとめてみることにする。

§ 2. 宝永地震における日向国の被災状況

宝永地震では、震源に近い宮崎県北の延岡藩の被害が最も甚大で、史料の記述内容も県内の他藩のものより具体的である。県北はリアス式海岸の地理的特徴も備えていることから大津波がおそい川を遡上し、沿岸部を中心に大きな被害が出ている。

また県央平野部の高鍋藩や佐土原藩、県南部の飫肥藩でも地震、高汐(津波)により城の石垣が崩れたり、田畑の被害が出ており、飫肥藩では「流死」が「男一人、女一人」出たと記録されている。

§ 3. 宝永地震の土砂災害資料

さて実は(§1)で述べた4つの南海地震のうち、土砂災害の記録が残るのは、安政南海地震(1854年)のみであるとされてきた[『宮崎県における災害文化の伝承』宮崎県土木部 2006年]。

しかし、今回、筆者が再調査を試みたところ、宝永地震に関しても、現時点で2点の土砂災害と思われる史料を発見することができた。なお、どちらも沿岸部ではなく山間部のものであった。

まず1点目は、県北山間部の延岡藩領高千穂の「珍書雑記」という史料であり、「(宝永)四年十月四日九ツ時、東の方ニ瀧崩の音して大なへゆるる、又一時、間ありてゆるるハ何十度といふ事数を知らず」とある。東の方角で滝が崩れる音がしたとされるが、表現が具体性に乏しく、地震の音が滝の音のように聞こえたのか、それとも実際に土砂崩れがあったのかは判断しにくい。

2点目は同じく県北山間部で、人吉藩支配下にあ

った現宮崎県椎葉村に関わる史料である。熊本県立図書館所蔵「相良文書」によると、「椎葉山ニ而茂地震同断、美之川、戸根川両筋、此外小谷筋山少宛崩故歟、水増濁らん」とあり、地震で山崩れがあり小河川が濁ったり増水したことが記されている。なおこの史料に関しては明らかに地震による土砂崩れがあったとみるべきものであり、定説を覆すものである。

(※上記史料は、『1707 宝永地震報告書』内閣府防災担当 2014年にも提供し掲載されている。)

ちなみに同史料によると、その南に位置する人吉藩支配下の「米良山」(現宮崎県西米良村、西都市東米良地区を含む県央山間部)では、地震の揺れはあったものの土砂災害などの被害は無かったという。

§ 4. おわりに

話がそれて日向国に直接関係はないことになってしまいが、宝永地震に際しては、その49日後に富士山が大噴火を開始したことが広く知られている。実は噴火の推移は宮崎県立図書館の所蔵する「伊東志摩守日記」(『庚戌抄書』より)において、文章に図をまじえて詳細に記されており、現在、研究史料としてかなり高い評価を得ている(『1707 富士山宝永噴火報告書』内閣府防災担当 2006年より)。

これは旗本の伊東志摩守祐賢が日向国飫肥藩主と親類であったことから、富士山噴火の様子を江戸で記録し飫肥藩に送ったことが背景にあるのだが、このように思わぬ所に意外な古文書が伝わっている例もある。

県内には、まだ未調査の史料もあると思われるので、今後、とくに安政南海地震、昭和南海地震の記録の収集、研究につとめ、南海地震に対する宮崎県民の防災意識の向上を図っていきたいと考えている。



図1 宝永4年富士山噴火の図(『伊東志摩守日記』より)